

1997年7月

時々、ぼんやりしてしまうことがある。周りで起きていることや、自分がやっていることに精神を集中するのが難しい。

最近はますますひどくなっている。朝起きた瞬間から、何かよくないことが起こるのではないかという予感に打ちのめされることもある。うまく呼吸ができず、手足が冷たい。頭痛がする。

日の出から日没まで、自分がやっていることはすべて、このよくないことを遠ざけるためのものだという気がしている。日を追うごとに、やることは多くなっていく。ひどく疲れる。何一つとして満足にできない。

いつも見られているような気がする。

見られるのは大嫌いだ。

プロローグ

エミールは、自分の管轄するスラムの子どもたちの後を追っていた。真昼の太陽のもとで息切れをしながら、立ち止まることなくシャツの立襟をゆるめる。

子どもたちが、興奮して上ずった声で彼を急かす。

「もうそんなに遠くないよ、エミール神父！」

「こっちだよ、この道！」

「あと少し！」

一歩進むごとに恐怖が増していく。口の中は泥を舐めたようにザラザラとし、錆びた鉄の味がした。

周囲のゴミの海から漂ってくる悪臭は強烈だった。昨晚の雨と照りつける日差しのせいで、ゴミ処分場には湯気が立ち込めている。彼らの周りやその上空に漂う濡れた紙と腐敗物と糞尿の臭いが混じり合った蒸気が、熱を帯びてゆっくりと上っていく。

彼は心の中でつぶやいた。—いつか慣れると思っていたが、そうはならなかった。私がこれに慣れることは決してないだろう。—

ついに彼らは直径1.5mほどの小さな空間にたどり着いた。ゴミが取り払われ、その下の堆肥のような古い層が顔をのぞかせている。

「あそこ」子どもの1人が指をさした。

エミールは、その瘦せた人差し指で示された方向を見る前から、空気中を漂うゴミの腐敗臭の中に、何か別の腐敗物から発せられる臭いを嗅ぎ取っていた。

小さく瘦せた青白い手が、ゴミの下から突き出している。

「マリア様……」彼は小声でそうつぶやき、子どもたちの方を向いた。「すぐに長い棒を持ってきてくれ」

3人の子どもが進み出て、普段ゴミを漁るときに使っている、先が曲がった細い棒を差し出した。彼はそのうちの1本を手に取り、見つけたものの方へ恐る恐る近づいた。

取りかかろうとした瞬間、ゆっくりと揺らめく灰色の恐怖のもやを、子どもたちに対する心配が、光のように貫いた。彼は手を下ろし、子どもたちの方を向くと、ここを立ち去るように言った。

「嫌だよ、エミール神父」まず初めに1人がそう言い、その後大勢が続いた。「僕たちも一緒にいるよ」彼らの顔には、とても大人びた、ある種の静かな決意と共感が見てとれ、エミールを驚かせた。

彼は密かにこの同伴を喜んだ。そしてそれ以上は繰り返すことなく、作業に取りかかった。

—よし、やってやろうじゃないか。—

大きなゴミの塊を次々と掘り返していくと、それは徐々に姿を現した。彼には何なのかわかっていたが、それを覆っている廃棄物がほとんどなくなるまで、目をやろうとはしなかった。

全てが終わると、子どもの全身が現れた。

8歳から10歳の少年に見えるが、エミールには正確な年齢を判断するのは難しかった。というのも、この辺りの子どもたちは栄養失調と病気のせいで、14歳や15歳になっても小さいまま、とても小さいままなのだ。

少年の顔は泥に突っ伏しており、何一つ身に着けていなかった。

その臭いは、今や周囲を漂う腐敗臭の中でもひととき際立っていた。ぞっとするような悪臭が、重くのしかかるように立ち込めている。

丸々とした輝くブルーブラックのビーズのような蠅が、少年の周りをブンブンと執拗に飛んでいる。

エミールには、その後頭部や背中に何の傷や傷跡も確認できなかった。死体に触れるのを恐れて、棒の先端を少年の胸の下に差し入れ、梃子のように使っ

て身体を仰向けにする。死体の重みで、あやうく棒が2つに折れるところだった。

突然、子どもたちの間に奇妙な沈黙が訪れた。それだけでなく、エミールを囲む世界のすべてが沈黙したようだった。近所から聞こえていた音も、ハイウェイを通る車の音も、耳の中で奇妙な低い轟となって消えていった。

最初、仰向けになった子どもの身体は動いているように見えた。それが体内にいる何千もの蛆によるものだと神父が気づくまで、数秒かかった。胸と腹に大きく開いた傷——いや、穴——があった。

心臓が取り除かれ、他の内臓も摘出されている。性器もなくなっていた。

エミールは少年の顔を見た。—お願いします、神よ、顔を見れば、これがかつては人間のものであったとわかりますように。—しかし次の数秒で、少年の顔がないことがわかった。そこには剥ぎ取られた跡があり、ゼリー状の眼球と筋肉のあちこちから突き出した骨が、ひどい状態で残されていた。

何がなくなっていて何が残っているのかを見分けるのは難しかった。

午後の激しい試合でついたのであろう紫がかったかさぶたが、その両膝にあった。

突然、魔法が解けたかのように、子どもたちを恐怖が襲い、彼らはまるでヤギのように飛び跳ねてその場を離れ、叫び声をあげながらゴミ山から逃げた。

エミールは死体からよろよろと遠ざかり、胃が空っぽになるまで嘔吐した。しかしそれでもまだ足りず、気持ち悪さからさらに吐こうと虚しい努力を続けた。

目から涙が滝のように流れていく。子どもたちの中で年上の3人が、まだそばにいるのが見えた。彼らはエミールに近づくと、何も言わずにその手を取り、静かに、優しく、ゴミ山から彼を連れ出した。

昨夜は雨だった。血のように赤い空から、滝のような大雨が、数時間にわたり止むことなく降り注いだ。

雨は好きだ。晴れた日とその暑さは、私を気だるく、活力のない、憂鬱な人間にしてしまう。おかしいだろうか。逆でなくてはいけないのだろうか。だが雨が降ると、私は力がみなぎるのを感じる。

雨は人を屋根の下へと走らせる。濡れるのと雷鳴と稲妻とを恐れて、やつらが近くの避難できる場所へネズミのように走る間、私は生きる気力を取り戻す。しなければならぬことをするのに、雨は絶好の機会を与えてくれる。

第1章

「ひどい天気ですね」

ガス・サエンスは顔を上げた。ジェロームの濡れた傘から、水滴が幾筋にも分かれて流れ落ちている。屋根を打つ雨音と、ステレオから大音量で鳴り響く音楽のせいで、彼が部屋に入ってきたことに気がつかなかった。

ジェロームは傘をたたむと、ドア横の壁の角に立てかけて周囲を見渡した。「タトはどこですか？」

タト・アンピルは、サエンスの若き解剖助手だ。ミュージシャンになる夢を叶えるため、医学部を4年で中退したが、2年経った今でも、どのジャンルのミュージシャンになるかを決めかねている。

「入れ違いになったんだ」鼻と口を覆っている手術用マスクのせいで、サエンスの温かく深みのある声はくぐもって聞こえている。「お熱いデートだとき」

「運のいいやつだ。少なくとも温かい場所にいるんですから」

エアコンのきいた室内は、不親切なほど寒い。さらには外の天候も相まって、いつも以上に寒く感じられた。天井の高いラボは、その壁や床、天井にいたるまで、一面が白で統一されている。そして、壁に固定された頑丈な腕木から吊り下がった棚から、部屋の隅に置かれた車輪付きの2台のストレッチャーにいたるまで、ほとんどの器材や家具は、艶のあるステンレススチールでできている。

ドアと反対の壁には、縦1.2m、横1.8mほどのホワイトボードが取り付けられ、そのすぐ近くには、蜂蜜色の木材で作られたパソコン用のテーブルと本棚、キャビネットが一体となった、自作のワークステーションがある。

ワークステーションの中央に鎮座するのは、とても大きなモニターのついた新品の立派なコンピューターだ。サエンスはそれを、日本の財団から得た補助金で購入した。頭蓋骨の写真を3D化することができるため、死体の身元の割り出しに一役買っている。法人類学者にとっては、本来時間のかかる退屈な作業

だったものが、近年のコンピューター技術の進歩によって、短時間で簡単にできるようになった。

『グレイの解剖学』、ボアズやクーン、ラカン、マリノフスキーの著書、ダーウインの『種の起源』、ラントシュタイナーの『血清学的反応の特異性』、コールマンとスウェンソンの『法廷における DNA：鑑定の手引き』が、アステリックスのコミック全巻セットや、黄ばみがかかった大量のクラシックギターのスコアとともに、本棚に並んでいる。他にも、光沢紙にフルカラーで印刷されたマグリットやキリコ、モディリアーニの画集や、1995年にシカゴ美術館で開催されたモネ展のカタログが並んでいる。

部屋のあちこちにある吊り棚やウォール・キャビネットには、サエンスが仕事で使っている器材や備品が、ごちゃごちゃと置かれている。石膏で型取りされた頭蓋骨と歯列の標本には、それぞれ細い紐で紙のタグがぶら下がっている。大きさの異なる蓋つきの標本瓶のいくつかには、変色したさまざまな形の不気味な物体が浮かんでいた。

ここを訪れる人の多くは、この独特なコレクションが丸見えになっている空間で神父と話すことに居心地の悪さを感じる。標本瓶には注目を集める力があり、たとえ絶対に見まいと決意しても、その力に抗うことはできない。

サエンスは、そのときどんな事例を調査しているかによって標本瓶の中から1つを選び出し、長い指を絡めて持ち上げると、胸の前で支えて中身を凝視する。そうして何時間も、血管と筋肉と膜組織とをじっくりと観察するのだ。

小さなテーブルの上には、テレスフォロ君——強化セラミック製の人間の胴体の模型で、鮮やかに色づけされたポリウレタン製の取り外し可能な臓器がついている——が、太ももから上だけの身体でまっすぐに立っており、その首なしの頭部には、ニューヨーク・メッツの紺色の野球帽が小粋に乗せられている。彼も同じく補助金で購入したもので、この補助金は医学部の授業で使うための解剖用の模型を扱っているボルティモアの企業から得た。

壁から壁に伝っている洗濯用のロープには、ラボの片隅にある暗室でサエンス自らが現像した写真のネガがずらりと吊り下げられている。

別の壁には、巨大なガラスの額縁に入れられた、レオナルド・ダ・ヴィンチによる解剖図の複製が、4点かけられている。それぞれ胸部の器官、心臓と主要な動脈、左を向いた頭蓋骨の断面、主要な女性の器官が描かれている。

ジェロームはサエンスを見ると、音楽に軽く耳を傾け、目をぎょろりと動か

した。「R. E. M. ですか？」

サエンスが微笑むと、その目尻にはカラスの足跡のような皺が浮き出した。それは彼が、日頃からよく笑う人間であることを物語っている。「君ならわかると思ったよ」

ガス・サエンスは、180cm を超える長身——今、彼が作業をしている解剖台は、無理に腰を曲げる必要がないよう、身長に合わせた高さに調整されている——で、体脂肪が少なく、しなやかな筋肉がついている。白人とインディオの混血に特有の骨ばった顔つきをしており、ふさふさのウェーブがかった髪は、サイドだけグレーになっている。“ロックスターの髪型”と、ジェロームはよくからかった。

ジェロームは、ステレオの音量のつまみを満足するまで回した。20 年近く経っても、大音量で音楽をかけながら解剖をするというサエンスのこの習慣には、慣れることができないでいた。「こんなことをするには、あなたは年を取りすぎているんじゃないですか？」

ステレオの周りには、CD やカセットテープが山積みになっている。アンドラーシュ・シフとグレン・グールドによるバッハのパーティータや、ジュリアン・ブリームとマヌエル・バルエコによるギター演奏。グレゴリオ聖歌がさまざまなジャンルで人気を博す前に収録された一大アルバム集。それらと一緒に、ザ・クラッシュや、ザ・ドアーズ、ジミ・ヘンドリックス、セックス・ピストルズ、グレイトフル・デッドの曲もある。R. E. M. は最近になって、この検死用レパトリーに加わった。

サエンスは顔を上げ、手術用マスクの下でニヤニヤと笑っている。「それを言ったらおしまいだろう。君や私が今後セックスすることになっても、年を取りすぎているということはないのと一緒にだよ」

ジェロームは口を開けて目を丸くし、ショックを受けたふりをした。「この墮落者！」

「それはどうも。飲みたければポットにコーヒーがあるよ」

若い方の聖職者は、それを聞くと髪についた水滴を払い落とし、急いでカップにコーヒーを注ぎ始めた。

ジェローム・ルセロ神父は、身長 175cm ほどで、しばしば“引き締まった”や“頑丈そうな”と表現される身体つきをしている。太い腕と広い肩が、細いウエストと尻に流れるようにつながっている。ウェーブがかった髪は短く刈り

込まれ、大きな目は黒に近い色をしている。彼にはある種の凄みのようなものがあり、そのせいで実年齢の37歳よりも年上に見られることが多かった。

歩くときに彼がほんの少しだけ片足を引きずることに気がつくのは、鋭い観察眼を持つ者だけだ。

ジェロームはコーヒーを一口すすると、顔をしかめた。「ううっ、まずい」

「コストカットでね」サエンスはマスクを顎まで下ろした。その手は汚れた手術用のゴム手袋に包まれている。

ジェロームは、年上の聖職者の舌が少しもつれていることに気がついた。「歯の具合はどうですか？」

するとサエンスは顔をしかめた。「その話はしないでくれ」

ジェロームは静かに笑った。サエンスの口の左奥には歯茎に埋もれたまま生えてこない親知らずがあり、本来なら数カ月前に抜いているはずが、先延ばしにしたせいでほとんど腐ってしまっているのだ。歯医者の話になると、サエンスは普段の柔軟で論理的な科学者から、怖がりの駄々っ子へと変身してしまう。

彼は、ジェロームが笑っているのに気づき、顔をしかめた。「ヴォス・ヴェストロス・セルヴァーテ、メオス・ミヒ・リンクイテ・モーレス」

神妙な面持ちを装ってうなずきながら、ジェロームが答えた。「『あなたはあなた自身の道を行くがいい、私には私自身の道を行かせてくれ』ええ、その通りです。ペトラルカが虫歯について言ったんじゃないことは確かですが。もちろんわかっていると思いますが、その歯を放置しておくあなたの身体にとって害になりますよ」

「私の身体にとって害になるのが何なのか教えよう。痛みと、恐怖だよ。それこそが私の身体にとっての害だ」サエンスはうめき声をあげながら背伸びをした。凝り固まった筋肉をほぐすため、肩をぐっと前に突き出し、再び力を抜いてリラックスしてから、すでに最終段階に入った作業に戻る。「どうやら6人目らしい」

ジェロームは、子どもの死体の残骸が横たわっている金属の台までやってきた。背中の下に置かれたゴム製のブロックで死体の胸部は上に反り、検死しやすいうようになっている。

「内臓がなくなっているんですか？」

「ほとんどね。心臓もなくなっているし、顔も剥ぎ取られている」

「無駄のない刃さばきですね」ジェロームは腰を曲げ、顔を斜めに傾けて、胸

の空洞を覗き込んだ。「頭蓋骨を？」

サエンスはうなずく。「強烈な一撃だ。骨の損傷を見るに、これは——」

「右側から殴打されたんですね」ジェロームは顔を上げた。「何歳くらいでしょうか？」

「私の見解では、12歳か13歳だな」

ジェロームはステンレススチール製のトロリーから手術用の手袋を1組取り、両手に着けた。手首の内側の肌に、ゴムがパチンと音を立てて当たる。彼はすばやく他の損傷部分も調べていった。「性器が取り除かれていますね」前のめりの姿勢になり、むき出しの顎骨の下に引かれたまっすぐな線に人差し指を這わせる。「他の子と全く同じように、顔の皮が剥がされています」

サエンスはうなずく。「顎の下を通して耳から耳へと、綺麗に水平に切られている」

「ナイフについて、わかったことはありますか？」ジェロームはサエンスを見上げた。

「またしても、長さ約15cm、幅2.5cm未満のとても小さな刃物だ。おそらく、手で細かい作業をするために使われるものだろう。非常に鋭利で、滑らかな切り口をしている。それと、顎骨の上に他の被害者と同じ溝がある」

サエンスは手袋を外し、医療廃棄物用のバケツに放り込むと、部屋の片隅にある製図台まで歩いていった。それは、大学のマス・コミュニケーション学部で不要になったのを譲り受けたもので、元々は映画学科の学生たちがアニメーションを描くのに使っていた。中央には、硬い可動式のプラスチックでできた半透明の円があり、その下に電球が設置されている。サエンスはそのスイッチを入れると、プレートの上に2組のネガを並べ、ジェロームに見るように促した。

ジェロームはそれに応じ、製図台へと歩きながら手袋を外すと、同じバケツの中に放り込んだ。そして、サエンスがネガの1組目の上に掲げた拡大鏡を、目を細くして覗き込んだ。その白黒の写真には、子どもの肉を抉り、顎骨にまで達している細く引っ搔いたような跡が写っていた。

「まだ骨に肉がついているから少し見づらいが、近づいてよく見ればわかるだろう」

この少年とは違い、他の犠牲者の多くは、殺害後、数週間から数カ月してからサエンスの検死を受けている。そのため、皮を剥がされた際に残った肉のほ

とんどが腐敗しており、骨が表面に露出している部分が非常に多かった。骨についた器具の跡も、この犠牲者よりはよく見えていたのだった。

若い方の聖職者は、少しの間レンズ越しに観察した。「傷は長く、深いですね。胴体に使われたのと同じ刃物でしょうか？」

「いや、あばらに刻まれた傷はもう少し太いものだ」サエンスは2組目のネガの上に拡大鏡を移動させると、ジェロームが調べるのを待った。こちらは、内臓摘出後に残った胸骨と、何本かのあばら骨を写したものだだった。

「カッターの刃先という可能性は？」

サエンスは眉をひそめ、首を振った。「もっと細くないと。もはや、刃物ではないのかもしれないな」彼はジェロームが遺体の方へ戻るのを見ると、ライトを消した。「歯について聞いてくれないか」

「ガス神父、歯についてはどうですか？」

「穴が開いている」

「口呼吸をしていたんですね。他の少年たちと同じように」

他の犠牲者5人のうち、3人の前歯には、肉眼では見えないほどの微小な穴が開いていた。これは、彼らが慢性的な呼吸器疾患のため、頻繁に口呼吸をしていたことを物語っている。彼らは、肉や魚を容易に手に入れることができない家庭で育ったため、食事におけるタンパク質が不足し、炭水化物や、他の柔らかくどろどろとした栄養価の低い食べ物に依存していた。タンパク質の欠乏は、彼らが10代になっても体が小さいことの原因でもあった。

「性的暴行の痕跡は？」

「ないね」

ジェロームはうなずく。「しかし、性器は切除されています……。これに関しては、まだ納得する答えが出せていません」彼は、異常心理学を研究していた頃に出合った数々の症例報告や臨床評価を思い返していた。「性的な葛藤のようなものがあるに違いないんです」そう言うと、ジーンズのポケットに両手を深く突っ込んだ。「死亡日時はわかりますか？」

「この子が発見されたとき、身体中に蛆が這っていた。湿度が高く、地面は濡れていたから、私は2、3日経過していたと見ている。長くて4日だが、可能性は低い」

サエンスはデスクに向かうと、読書用の眼鏡をかけ、クリップボードを手に取り、目を細めて染みのついたカーボン複写紙に印刷された書類を読み始めた。

「他の子のときと同じく、遺体の周りには血痕がほとんどなかった」

「そこから考えられるのは……」

「この子は他の場所で殺されたということだ。それがどこであるにせよ、大量の血が流れたはずだ。つまり、人目につかない場所でなくてはならない——風呂場やガレージのような。それに、疑われるのを避けるためには、犯人は遺体を捨てる前に服を着替える必要があっただろう」

ジェロームは片手で顔をこすると、少しの間その手を口に当て、ホワイトボードの方へ向かった。サエンスも後を追った。

ボードのいちばん右側の列の上には、“6”という文字が書かれている。いちばん左側の列には、上から年齢、性別、発見された日付、死亡推定日、損壊状況というカテゴリーが並んでいる。

「この遺体が発見されたのは、今月の7日です」ジェロームはそう言うと、マーカーを手に取り、“死亡推定日”と書かれた行の右端にある空白を見つめ、数を数えるようにボードを叩き始めた。そしてサエンスの方を振り返る。「ここに入る数字は何でしょう？」

「法医学者によれば、いちばん可能性が高いのは5日だそうだ」

ジェロームはホワイトボードに向き直ると、空白に“7月5日”と書き込んだ。そしてマーカーの蓋をはめ、ホワイトボードの縁(へり)に戻すと、後ろに下がった。そのとき、サエンスがボードを凝視していることに気がついた。眉間に皺が寄るほど集中しているようだ。

「何かおかしいことでも？」

サエンスは、突然何かをひらめいたようだった。「我々は今まで、日付に注目していたね」

「ええ」

彼は長い手足を慌ただしく動かしながら、急いでボードのそばを離れ、デスクへと戻った。そして、そこら中の書類やフォルダやガラクタの山をかき分けると、目当てのものをを見つけ出した。「もしかすると、もっと曜日に注目すべきだったのかもしれない」そう言って卓上カレンダーを持ち上げた。

ジェロームはすぐさま、彼が何をしようとしているのかを察した。「わかりました」すばやくホワイトボードに向き直る。「始めましょう。最初の少年が見つかったのは2月2日。法医学者によると、死亡推定日は前日の夜か日中です」

「2月2日は日曜日だ。死亡推定日は土曜日」

ジェロームは、日付の下に曜日を書き込んだ。「2人目の少年は——3月3日に発見されています。死亡推定日は1日」

「3日は月曜日だ。死亡推定日は——土曜日」

ジェロームは、先ほどの右隣に書き込んだ。「3人目の少年は——4月6日に発見されています。死亡推定日は前日の夜か日中です」

「日曜日と——土曜日」

「4人目は——5月5日。死亡推定日は、3日です」

「月曜日と——土曜日」2人はこの事実を飲み込もうと、少しの間動きを止めた。その後、サエンスが言った。「続けよう」

「5人目の少年は——6月10日に発見されています。死亡推定日は7日です」

「火曜日と——土曜日だ」

「そしてこの少年は——今月の7日に発見、死亡推定日は5日です」

「月曜日と——土曜日だ」サエンスはカレンダーから顔を上げ、ボードに書かれた新たな手がかりを吟味した。「犯行は、2月から毎月、最初の土曜日に行われているんだ」

エミールは、サエンス神父の学部オフィスに座っていた。

室内の身に染みる寒さの中、彼は靴の中の靴下の湿り気と、ズボンの足首から下についた泥汚れをはっきりと感じていた。両腕を胸の前で交差し、指はしっかりと脇にはさんでいる。

外の嵐は激しく、政府は台風2号が首都マニラを含むルソン島の一部に上陸したと発表していた。キャンパス内の木々の枝は、風によってあらゆる方向へしなっている。窓ガラスには雨が打ち付けている。無地や花柄や模様の入った傘が、ガラスのすぐ向こうにひょいと見えたり、隠れたりしている——荒れ狂う嵐に捕まった者がいるようだ。

ドアが開いた。ガス・サエンスが、風で裏返ったびしょ濡れの傘と格闘しながら入ってくる。ジェローム・ルセロもそのすぐ後からやってきたが、彼の傘はいくらかましな形を保っていた。

「ああ、エミール、長らくお待たせして申し訳ない」サエンスはそう言いながら、両手を前に出して歩み寄ると、温かいが濡れている手で教区司祭の手を包み込んだ。

「大丈夫です、サエンス神父。ルセロ神父」

サエンスは2本の傘を持つと、水を切るために、部屋の隅にあるプラスチックのバケツに入れた。「コーヒーでも？」と、エミールに尋ねる。

「ええ、お願いします」

エミールは、コーヒーがたっぷりと注がれたカップを喜んで受け取った。そして一口すすると、冷まそうと息を吹きかけた。

「いい大型台風日和ですね」椅子を引きながらジェロームが言った。「あなたの地区では、授業は休講になったんですか？」

エミールはうなずく。「今朝早くに。生徒の半分はすでに登校していたんですが」

ジェロームは不満そうに鼻を鳴らした。「はあ。あなたも、ここ数年の経験で、今日は休校になると生徒たちもわかっていると思っていたのでしょうか。今朝まで台風が来るのを知らなかったわけでもないでしょうに」

サエンスはデスクの向こう側に座ると、エミールの方を向き、「それで」と彼を促した。

エミールは、コーヒーカップを下におろすと、両手を強く握りしめた。質問をする前に、自分自身を落ち着かせようとしていた。「我々の教区の少年なのでしょうか？」

サエンスは一瞬躊躇した。「まだ確かなことは言えないんだ。だが、他の子と全く同じように切断されている」

「ああ、神様」エミールは十字を切った。「犯人はなぜこんなことを？」

ジェロームは立ち上がると、窓のブラインドを上げ、灰色がかった日差しがもっと室内に差し込むようにした。—エミール、もしその答えがわかっていたら、我々は犯人を止めることができるだろうさ。—心の中でつぶやき、窓の外の1点に視線を合わせ続けた。と言っても、実際に何かを見ているわけではなく、問いに答えることもなかった。少しの間、部屋の中は静まり返り、外の風や雨の音だけが聞こえていた。

サエンスは、デスクの上で両手を握りしめた。「まだわかっていないんだ。正直言って、それを知ることは永遠にないのかもしれない。だが、君にできることはある。怪しい人物がいないか目を配るよう、教区の人々に伝えてほしい。そして子どもたちには、ゴミ処分場には夜遅くまでいないように注意してくれ」

ジェロームはうなずいた。「慎重にやってください。パニックを起こさせないように。犯人が誰であれ、当局がすでに自分を探していると警戒させないように」

にしなければ」

「では一犯人がミスするのを待つと？」エミールは顔をしかめた。

「常識に反していると思うのはもったもです、エミール」ジェロームは言った。

「でも、脅威を感じたら、やつは姿を隠すでしょう。そうなれば、我々は捕まえるチャンスを永遠に逃すことになるかもしれません。別の場所に逃げたとしても、同じ犯行を繰り返さない保証はないですし」

エミールは少しの間、思案しているようだった。「わかりました、ガス神父。あなたの助言に従います。早く犯人を見つけられるよう祈っています。住民は馬鹿ではありませんから、すでに疑問を持ち始めています。恐怖は募る一方です。貧しい地域で、彼らはずっと権力者に無視されてきたんです。もし、恐怖が怒りに変わったら—そのとき何が起こるか、あなたならよくご存知でしょう」

「その通りだ、エミール。約束するよ、この事件は決して無視されることはない」そしてジェロームに目をやった。「我々がそれを許さないさ」

ここからは、ジェロームの夢の中の出来事だ。

それはいつも、雨の降る暗闇の中に立っているところから始まる。彼はたった1人で、ゆるい半ズボンにTシャツ、ゴム製のスリッパという、寝るときの格好をしている。そしていつも、とても寒かった。

彼は聞く。子どもが助けを求めて叫ぶ声を。

それで、走り出す。あちらへ行き、こちらへ行き、どろどろとしたぬかるみに足を滑らせ、まず片方のスリッパが脱げ、次にもう片方も脱げてしまう。足が滑った先にあった、溝のある小道へ深くはまり込む。体勢を立て直そうと、地面を強く引っ掻くたびに、手足の爪の中に泥が深く入り込んでくる。彼は、心臓が鼓動を止め、肺が動かなくなり、両脚が痛くなるまで走り続け、子どもに向かって叫んだ。

—どこにいるのか教えてくれ。何か言ってくれ。見つけ出すから。—

そして彼は気づく。その声は、もはや自分のものではないことを。それは小さい、子どもの声だった。

またもや彼は泥とゴミの中でよろめき、脚が言うことを聞かなくなった。続いて腕もそうだった。すると肩に手が置かれ、荒々しく、強く、押し倒された。顔が泥に押し付けられたとき、彼はその臭いを嗅いだ——温かく、湿った、腐敗物の甘い臭いを。

彼は振り返った——振り返ろうとした——もう少しで男の顔が見えるところまで。熱い息が頬にかかり、言葉が、彼には理解できない言葉が、まるで濃い血液が耳の中でゆっくりと混ざり合うかのように囁かれた。そして男の唾が、小さな破片のごとく彼の顔に降り注いだ。

いつでも、まず岩が、それから鋭く、細く、冷たい刃物がやってくる。

安全な自分のベッドで目覚めると、全身が汗でぐっしょりと濡れていた。頭をはっきりさせるために首を数回振り、静寂の中で荒い呼吸が元に戻るのを待った。

ブランケットから両脚を出し、ベッドの端から下におろすと、暗闇の中でスリッパを足で探った。バスルームへ行き、明かりをつける。

ジェロームが蛇口をひねると、冷たい水がほとばしった。身体を前に倒し、顔に水を浴びる。

それが済むと、薬棚についている小さな鏡を見つめた。彼の目は白目がないように見えた。両目は丸く落ち窪み、暗く、答えのない疑問に満ちた黒い穴だった。まだ水が滴っている彼の顔は、青白く、やつれている。この醜い仕事に携わってからというもの、今まで見たこともないほど青白く、やつれていた。患者の診察やカウンセリング、大学での授業と、宗教上の義務のはざままで、この連続殺人は、彼を消耗していた。思考を独占し、恐怖で満たしていた。

しかし、彼らはジェロームを呼び、サエンスを呼んでいる。2人とも、後戻りはできないところまできていた。

イエスは言われた、「イザヤは、あなたがた偽善者について、こう書いているが、それは適切な預言である、『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』。あなたがたは、神のいましめをさしおいて、人間の言伝えを固執している」。また、言われた、「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ」。

マルコの福音書 7:6-9

(訳注：『口語 新約聖書』日本聖書協会、1954年版を参照)

2カ月前

第2章

ジェロームがサエンスのオフィスのドアを開けると、開かれた窓のそばで、サエンスが物思いにふけりながら立っているのが見えた。

「どうも」と彼は言ったが、サエンスは振り返らなかった。ジェロームがデスクの上に目をやると、一通の手紙が開いたまま置いてあるのが目に留まった。手紙のあちこちに皺が入っており、サエンスがその長い指に怒りをこめて、大きな手でぐしゃりと握りしめた後、また平らに戻したのだろうことが想像できた。

ジェロームはしばらくそこに立ったまま、サエンスが何か言うのを待った。しかし黙ったままだったので、若い聖職者は静かに促した。「すみません」

サエンスは、窓から見えるキャンパスの芝生に、直線状に並んでいるヤシの木々をじっと見つめていた。

「芽枯病だ」ついに彼は応じた。

ジェロームは困惑して彼を見上げた。「何ですって？」

「芽枯病だよ」サエンスは繰り返した。「あの木々が芽枯病だと施設管理の責任者に訴えたんだが、彼は聞く耳を持たなかった。最初は1本だけだったのに、今では他に3本が感染している」

ジェロームは窓に歩み寄り、木々に目をやると、混乱した様子で再度サエンスを見た。「死にゆく運命にある木について考えていたんですか？」

「最初の木はずっと離れたところにあるんだ。だが時々、風がこっちに向かって吹いてくると感じるんだよ、木の細胞組織が腐敗した臭いを」

「そうなんですか」その言葉尻は、疑問を投げかけるときのように上がっていた。ジェロームは彼を見つめながら、顔をしかめた。「すみませんが、何の話かさっぱりです」

「菌なんだよ。わかるだろう？ フィトフトラ・パルミボラという病原菌で、ヤシの木の中心に巣食うんだ。いちばん上の葉が枯れているのを見て、そうだとわかった。あの菌は上から下に、木の内側を食らっていくんだ」

「なるほど」ジェロームは深呼吸をした。それからまもなく、彼もまた木々を見つめた。車や学生たちが、芝生を横切る道を行き交っている。1人の学生が、

窓から見える2人の聖職者に気づいて笑みを浮かべ、手を振ったが、彼らが気づかないのを見て、再び歩き出した。「他にもあるんでしょうか」

「きっとあるだろう」サエンスは窓から離れ、デスクに向かうと、厳しい表情で手紙を見下ろした。「あれが腐敗というものの本質だよ。誰かが止めなければ、いつまでも続くんだ。自らが巢食っているものを死に追いやるまでね」

ジェロームは胸の前で腕を組むと、窓枠に寄り掛かってサエンスを観察した。「枢機卿が考えを変えることはない、わかっているでしょう。彼がかかわっている限り、この問題は終わったことになるんです」

サエンスの表情は、きつく押しえつけた怒りによって暗くなった。「まだ終わってはいない。終わることはないんだよ。ラミレスが自分のやったことの報いを受けるまでは」

サエンスのオフィスに、電話のベルが大きく鋭い音で鳴り響き、ジェロームは飛び上がった。年上の聖職者が電話に出ようとしなかったため、彼は尋ねた。「僕に出てほしいんですか？」

サエンスがうなずいたので、ジェロームは受話器を取った。「はい」電話の相手はスーザンだった。彼女は、サエンスが教える社会人類学部の管理スタッフで、彼の秘書のような役割も果たしていた。「はい、いますよ。聞いてみるので、少し待っててください」ジェロームは送話口を手で覆うと、「スーザンが昼食がほしいかどうか聞いてます」と囁いた。

サエンスは手紙から一度も顔を上げずに首を振り、この申し出を突っぱねた。

ジェロームはためらったが、受話器に顔をつけた。「ああ、スーザン、どうもありがとう。でも彼はまだお腹が空いてないようですし、やらなきゃならない仕事がたくさんあるんです。もし空腹に耐えられなくなったら、カフェテリアまですっ飛んでいくと思いますよ。どんなふうにか、想像できるでしょう」少し間があって、くすくすと笑う声が出た。「午後の講義に向かう途中で、ショーケースの中から何か選んでがつつきますから。心配しないでください。もう大きな子なんですから」自分がわざと陽気な声を出していることに、スーザンは気づいたのだろうか。「了解です。では、また」

受話器を置いたときも、サエンスは先ほどいた場所から動いていなかった。「いいですか、あなたはやつを10年以上も、この組織の中で追いかけてきたんです。でも、あの枢機卿はただ、やつを異動させるだけだ。子どもたちは何もしてもらえないことがわかっているから、話そうとしません。やつには権力を

持つ友人がたくさんいるんです。あなたにやれることが、まだ他にあるというんですか？」

サエンスはため息をついた。「正直言って、わからないんだ、ジェローム。だが、何かやらねばならない。止めなければならないんだ」

イサガニ・ラミレス神父は、マニラの大司教区における教区監督である。彼は未成年者に対する不適切な行為が発覚するまで、長年にわたりケソン市内で教区司祭として務めていた。サエンスは、以前教えていた物静かで優秀な若い男子学生が、大学を卒業できないことに苦しみ、自殺を試みたことをきっかけに、この事件にかかわることとなった。その学生がなぜそんなことになったのかを調べるうちに、彼が子どもの頃、ラミレスから性的暴行を受けていたことに行きついたのである。

サエンスは、この若者の主張の裏付けをとる中で、それが真実である証拠を見つけた。しかし、大司教区へ送った報告書に返事はなかった。数カ月後、サエンスは、ラミレスが他の教区へ異動になっただけで済んだことを知った。

サエンスは憤りを感じたが、その先の行動については慎重に考えるように助言を受けていた。そのため、良き修道士がするように、思案し、祈り、導きと洞察を探し求めた。そして最終的に、彼の良心は、ラミレスが犯した違法行為のさらなる調査と、彼を他の教区に移した決定に関する情報を追求し続けることを自身に求めたのだった。

新しい教区で、ラミレス——聴衆をとりこにするカリスマ的な説教者であり、魅力的で、楽観主義で、人々に好まれる噂好きとも言える性格の持ち主——は、その地区の孤児やストリート・チルドレンのための養育院を運営する援助を求め、裕福な支援者たちはすぐに応じた。〈カンランガン・ニ・クリスト〉——「キリストの保護」——と名付けられたその施設には、初め20のベッドがあったが、たちまち30になり、40になり、今では70にも及ぶ。

サエンスはこの行いのすべてを遠くから監視していたが、彼の訴えが何年も無視され続けていることに失望していた。その上ラミレスは、今や12歳以下の子どもたちに以前よりも容易に接触でき、影響力も強めている。暗澹たる思いだった。しかし、希望は完全に絶たれたと思われたそのとき、シスター・ミリアム・タギバオが、疑念を胸に突然サエンスのもとを訪れた。彼女は2年の間ラミレスの養育院で働いていたが、そこで目撃したことや、徐々に強まっている隠匿と不安が渦巻く空気に心をかき乱していた。彼女が打ち明けたことは、

サエンスにも、彼が助言を求めたジェロームをはじめとする専門家たちにも、信頼に足るものだった。そして、〈カンランガン〉へのラミレスのかかわりにサエンスが抱いていた最悪の不安を、確信に変えるものに思われた。

シスター・ミリアムは、ラミレスに対する一連の新たな訴えを提起することに一役買ってくれた。さらに今回は、教会の審問会よりも、犯罪捜査機関に対して強く訴えることにした。しかしラミレスには、教会のヒエラルキー内にも、外の社会にも、強い権力をもつ友人がおり、サエンスはその後の教会の調査から締め出されてしまった。証言することを約束していた子どもたちは、1人また1人と恐怖で怖気づき、手を引いていった。サエンスについては、少々トラブルメーカーであるという評判が広まるようになり、シスター・ミリアムは、遠く離れたコタバト市への異動が突然決定した。

そうして今日までもたもとと秘密裏に行われてきた調査の結果は、ラファエル・メネセス枢機卿からの一通の手紙という形でもたらされた。サエンスが恐れていた通り、またも他の教区への異動が決定したというものであった——ラミレスは、〈カンランガン〉のある区への接近は最小限にするよう求められているものの、依然として養育院の院長におさまっていた。

「やつは同じことを繰り返すだろう。どの地区に異動になろうとも、どんな事業に携わろうともだ。そして運営している養育院——やつはあれを、犠牲者を選び、いたぶるための手段として使っているにすぎない」

「しかし、ガス」——ジェロームは、彼の前腕にそっと手を置いた——「子どもたちの証言なしに、他に何ができるというんですか？」

「言っただろう、わからないんだ」珍しいことに、サエンスは声を荒げたが、ジェロームがたじろいだのを見て、すぐに平静を取り戻した。そして、落ち着いた声で言った。「だが、何か考えなければ」

ジェロームは腕時計に目をやった。「ああ、あと30分で講義が始まっています」

サエンスは大きな両手を空中で振った。「ほら、行った行った」そう言うと窓の方へ戻り、死にゆく木々を再び眺め始めた。

「3時には終わります。その後、ええと、6時半くらいまで患者を診ることになっています」相手がもう聞いていないように見えたので、ジェロームはより大きな声ではっきりと言った。「7時頃に、あなたのところに立ち寄るといのはどうでしょう？ 夕食を買ってきますよ。どこか安いところで」冗談も飛ば

した。

「そんな時間はないだろう」サエンスは答えた。「まだ旅の支度をしていないじゃないか。フライトは明日なのに」

ジェロームは学会に参加するため、翌日シカゴへ発つことになっていた。サエンスが正しいことはわかっていたし、今夜夕食の席で、この問題をさらに話し合う時間はないことも明らかだった。

「早く済ませればなんとかなりますよ」そう言ったが、サエンスは首を振り、それでこの会話はおしまいだった。

サエンスが枢機卿の決断を重く受け止めるであろうことは以前からわかっていたが、サエンスのこの態度はジェロームを不安にさせた。ジェロームは他にすることや言うことが見つからないまま、その場に立ち尽くしていた。少しして、渋々次の予定のためにその場を離れることを決意した。「では、失礼した方がいいようですね」

「うむ」

「大丈夫ですか？」

「うむ」

ジェロームは待ったが、サエンスの心は遠くへ行ってしまうていた。それでそれ以上は何も言わず、部屋を出た。後ろ手にドアを閉めようとしたが、そろそろサエンスの生徒が相談にくる時間だったことを思い出し、開けたままにしておいた。そのままきびきびと廊下を進んだが、角を曲がって2、3歩のところで誰かと思いきりぶつかってしまった。

「すみません」ジェロームは謝ってから、相手の顔を見るには頭を上を傾げなければならぬことに気づいた。かなり背の高い男だった。それに、かなり年老いてもいる。ジェロームはいつの間にか、倒れまいと、男の前腕を両手で軽く掴んでいた。それはバロン・タガログ（訳注：フィリピンの男性用のゆったりした長袖シャツ）の下で、ほとんど骸骨のような感触をしていた。「本当にすみません。注意不足でした。大丈夫ですか？」

男が床に落ちた茶色の封筒を指さしたので、ジェロームはすばやく屈みこんでそれを拾い、彼に返した。「ありがとう」深く、静かで、年の割に荒々しい声だった。「私は平気だよ」その声を聞いた瞬間、ジェロームはこの人物が誰だか思い出した——何日か前にテレビでやっていた記者会見で聞いた声だったのだ。「サエンス神父のオフィスを探しているんだがね」

「ええ、ええ、そうでしょうとも」ジェロームは好奇心をそそられた。この訪問者をサエンスの部屋へ連れていき、訪ねてきた理由が判明するまでその場にしようかと考えてみた。しかし、そうしたら講義に遅れてしまう。「廊下を左に進んで、消火器を通り過ぎてから3番目の部屋です」

男はジェロームが示した廊下の方向へ目をやると、振り返り、彼の目を正面から見据えた。

「ありがとう、ルセロ神父」

—もちろん、僕が誰だか知っているでしょうね。—ジェロームは角を曲がって消えていく男を見ながら、そう思った。

サエンスは、手紙をシュレッダーにかけてしまうか、相次ぐ失敗を忘れないためにファイルして取っておくかを決めようとしていた。そのとき、背の高い痩せた男が、開いたドアの向こうに姿を現した。彼はサエンスを見て、招かれるのを待っているようだった。廊下のほの暗い光の下に立っていても、サエンスには男の着ているバロン・タガログの布地が上等なもので、そこに施された刺繍はさらに上等なものであることが見てとれた。

「どうされましたか？」サエンスは立ち上がった。

「神父様」男はオフィスに入ってこようとはせず、その場に立っていた。

「何かご用ですか？」

男の両目は細く、その表情は奇妙だった。「外を歩かないかい、神父様。散歩するのに良い日和だよ」

男は廊下の方へ一歩下がり、サエンスが出てくるのを待った。真上の天井についている蛍光灯の1つが、彼を照らしている。

そこでサエンスは、彼をよりはっきりと見ることができた。髪はほとんど白くなっており、ふさふさとした眉も白くなりかけている。青白く、深い皺の入った肌が、しっかりとした顔の骨格の上に被さっており、目は鋭く、鼻はオウムのくちばしのように曲がっていた。サエンスも背が高いが、この男はもっと高く、195cmほどあるように見える。バロンとカーキ色のズボンという出で立ちでは、まるで長身の青白い幽霊のようだった。平たい茶色の封筒を脇にはさんでいる。彼はただ立っていたが、腰はわずかに前に反っている——小さく黒い、注意深そうな目以外は、かなり年老いているように見えた。

サエンスは、ようやく彼が何者であるかに気づいた。国家捜査局長官のフラ

ンシスコ・ラスティモーザだった。

「もちろんです、長官。すぐに準備します」

太陽は、もくもくとした灰色の雲の一群に隠れ、木々の枝は強い風に揺れていた。2人の男は、両側に緑の並木のある狭い道をゆっくりと歩いた。その歩調は、サエンスの前を行く年老いた男に合わせたものだった。2人は人類学部の入っている建物群からどんどん遠ざかり、キャンパス内の、芝生のある開けたスペースへやってきた。ところどころに木が植えられている。分かれ道に差し掛かると、随時神父が先に立って進路を決めた。これからの予定によって、ある者はキャンパス内の他の学部棟や建物に向かい、ある者は迂回路を進んで寮へと向かっていた。

サエンスは、長官がなぜ何の前触れもなく姿を現したのかが知りたくて仕方なかった。すでに数分前、建物を出たときに尋ねたのだが、答えてはもらえなかった。サエンスは、長官が話し始めるのを慎んで待つことにしたが、相手の方は核心的な話をするのをまったく急いでいないようだった。

ついに話し始めたかと思ったら、長官はこう言った。「やつを捕まえるんだろう、君は」

サエンスは立ち止まり、男の頭を背後から見つめた。「何ですって？」

ラスティモーザ長官も立ち止まり、サエンスの方を振り返った。「君のモンシニョール（訳注：カトリックにおける高位聖職者に対する敬称）・ラミレスのことだよ」彼はサエンスの顔から徐々に血の気が引いていくのを、内心楽しく観察した。「驚いたようだね、サエンス神父。このことを知っている者が他にもいるとは思わなかったのかい？」

「誰も気にしていないことは確かだと思っていました」聖職者はそう答えたが、その声は彼の予想よりも多くの怒りと苦みを含んでいるように聞こえた。「それと、やつは私のモンシニョール・ラミレスではありません」

年老いた男はズボンのポケットに両手を突っ込むと、再び歩き始めた。「『伝道の書』の第3章を思い出したんだがね、神父様。君ならもちろん知っていると思うが」

サエンスは深呼吸をした。「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」

「生るるに時があり、死ぬるに時がある」男が続けた。

「私に何を伝えようとしているんですか、長官」

「もしかして、17 節を忘れてしまったんじゃないかね、神父様」

「わたしは心に言った、『神は正しい者と悪い者とをさばかれる。神はすべての事と、すべてのわざに、時を定められたからである』と」（訳注：『口語 聖書』日本聖書協会、1955 年版を参照）サエンスはこの節を少しの間噛みしめ、ため息をついた。「私は何年もこれと向き合ってきました、長官」

「君は神の子だ。君のような人々は、満足のいく成果がもたらされる可能性を信頼しなければ。悲しいことに、それが大幅に遅れていたとしても」

「神への信頼ですね、もちろんです。人への信頼は——正直言って、私は時々……」サエンスの声は、か細くなって消えていった。

「ああ。人への信頼か」長官はため息をついた。「私も同じ気持ちだよ、神父様」2人は再び歩き出し、1、2分の間、黙ったままだった。「モンシニョールに対する神の時が訪れるのを待つ間、神父様、君の時間と高い知性を少しばかり、私が持ってきた問題に捧げてもらえないだろうか」そう言って彼は笑ったが、その笑顔は悲しく、疲れ切っていた。「君の最近の失望を考えると、これは割に合った仕事だと思うんだがね」

「話を聞きましょう」

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。